



An abstract geometric design consisting of several white lines of varying thicknesses on a dark, textured background. The lines form a series of nested, irregular rectangular frames. Some lines are solid, while others are dashed. The overall effect is minimalist and architectural.

有馬頼義 新田次郎 菊村到集

日本推理小説大系12 東都書房

日本推理小説大系第12巻

有馬頼義 新田次郎 菊村到集

定価三八〇円

著者 有馬頼義 新田次郎 菊村到

発行者 黒川義道

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

発行者 東都書房

東京都文京区音羽町三丁目一九

電話 東京(九四一)三一一一

振替 東京 七二七三二一

落丁乱丁本はおとりかえします

昭和三五年八月二〇日第一刷

目次

有馬頼義

四万人の目撃者 5

リスとアメリカ人 104

新田次郎

落石 217

毛髪湿度計 247

菊村 到

悪魔の小さな土地 267

硫黄島 282

解説 平野 謙 297

有馬頼義

四万人の目撃者

その、いまわしい日曜日の朝のことを、新海江は後になって、いやになるほど、根ほり葉ほり聞かれた。警察の人からも、新聞の人からも、妹の長岡阿い子からもきかれた。しかし、何かが、それによって解けてくる、というような出来事は、全く何一つある筈がなかった。平凡な朝が来て、いつもと少しもかわらない一日がはじまっただけであった。

ただ一つ、こういうことは言えたかも知れない。それは、何の理由もなく、良人の新海清の持っている寡黙気のようなものが、何となく、暗く、——ちょうど、夕暮が、何処からともなく近付いて来て、都会をその薄墨の中に溶かし込んで行くように、空しさを感じさせるようになっていた、ということであった。しかしその

ことは勿論、その日曜日の朝に限ってやって来たわけではない。人一倍神経質な新海清にはわかっていたことなのだし、あらたまって話題にのせないでも、妻である菊江にも感じられた。それは多分、新海清のからだの中の何処からか、ひそかに湧き出て来る老いのようなものであった。新海清のからだから湧いて来たそれは、新海清の生活全体に、何か影のようなものを落しはじめ、菊江もその中に包まれてしまった。それが老いだとすれば、結局、いつかは対決しなければならぬものであった。そのことが、特にそのいまわしい日曜日の朝、二人の間で話題になったわけでもなく、その対決の時がその日だという切羽つまった気持は、少しもなかった。

新海清は、菊江が起き出して台所へ立ったあとで、間もなく起きて庭へ出た。毎朝のことであつた。清は秋の近い朝日を背中にあびて、バットを振った。そのバットは、彼がゲームに使うには、少しばかり重くなりすぎたのだが、アメリカの有名な野球選手にもらったというバットの履歴を、彼はかなり大切にしているようであつた。

朝食も、いつもとかわりはない。熱い味噌汁の中に、卵を落してあつた。蓬萊屋の黒豆と、海月のうにあえ。いつものように、清は、無口にそれを食べた。

「晩には、肉を買っておいてくれ」と彼は、食事がすんで、ビタミン剤の錠剤を口の中へほう

り込んでから言った。

それから、どんな話をしたか、菊江は、殆んど覚えていない。覚えていないほど、どうかしていたのではなく、何も記憶に残るような話をしなかったのだ。

九時頃、新海清が新聞のスポーツ欄をひろげている時に、近所の子供が一人、庭先からはいつて来て、友達に頼まれたというサイン帳を出した。菊江がそれを良人の処へ運び、また子供の処へ戻した。スポーツ欄を見ている新海清の顔に、特別なものは浮んでいなかった。四打席無安打という土曜日のゲームも、特別に彼を口惜しがらせてはいないようであつた。

十時頃、妹の長岡阿い子から電話がかかった。大した用ではない。野球場へ行くかとさきから、自分は行かないと答えた。まだ電話口にいる時に、清が何か言ったので

「ちょっと待って」と妹に言ってふりむくと、清は顔をあげずにこう言った。

「第二試合は矢後だと言っておけ」

その通りを、妹に伝えた。

十一時に、新海清は、家を出たが、出る時、いつものように、ビタミン剤をもう三錠、口の中へほうり込んだ。夏の間は、ダッグ・アウトでレモンを吸っていたが、自分の身体には、ビタミン剤の方がいい、と言っていた。

門を出てから、近所の子供の声が聞えたから、またサインをさせられているのかも知れないと思つた。しかしそれを見たわけではなかった。

良人が出かけてしまうと、自分だけ、簡単な屋の食事をした。それから洗濯や片付けものにとりかかった。

仕事のすんだのは、三時頃であった。誰も来ない。家の中にも、秋の来たのが感じられるような空気の澄み方であった。洗濯ものを裏へ干して、風呂の掃除をして、新しい水を汲み終った時、車が表にとまった。入沢マネジャーが、ころがるようにして玄関へ飛び込んで来て「すぐ球場へ行って下さい。そのままでもいいから、早く！」と言った。

「どうしたんですか。何かあったの？」と言いながら玄関へ出て行って、入沢の顔を見たとき、菊江が感じたものがあつた。それは、理由もなく、自分達の生活を見舞った絶望のようなものであつた。菊江は、新海清の死に目に会っていない。

——十一時に経堂の家を出た新海清は、いつもの道順で、都心のK球場へ来た。途中で、何もかかったことはなかった。彼が考えていたのは、今日は少なくとも二本は打たなければならぬ、ということであつた。木曜日のゲームに一本打ち、中一日おいて昨日は一本も打っていない。打率は二割六分五厘に落ちていた。九月には二割六分五厘というのは、もはや絶望的であつた。今年二割台とすると、二年続けて三割を割ったことになる。打率として、何も恥じる程のものではないが、十年の間、一年をのぞいて三割を打ちつづけた新海清にとつて

は、残念であつた。世間は、ホームランを打たなくなつたとき、彼の失調を責めた。しかし、その年は三割二分をマークした。その翌年二割九分で終つたとき、新聞は彼の体力の限界を云々した。その翌年から二年続けて三割を打つたとき、世間は彼の精進と復調をたたえた。ホームランを打たないことを責めなかつた。新海清は、リーグで唯一一人の、信頼すべき四番打者であつた。しかし、彼の努力にもかかわらず、去年と今年の不調は蔽いがたかつた。それは、打撃以外の面にも、徐々にあらわれて来た。走るのが遅くなつた。みすみす二塁を奪えるような当りをして、一塁にとどまるが多くなつた。キャンプのトレーニングや、毎朝のランニングも、もはや新海清の身体を昔のようにする効果はなかつた。彼は、逆に、自分をいたわるようになつた。

「打順を下げて下さい」と彼は監督の加治屋淳一に頼んだことがあつた。しかし、たとえ二割九分でも、その打率は、チームでは最も高い打率であつた。彼は今年も、四番を打ちつづけた。しかし、勝敗に關係のない最終打席などに、矢後七郎が代打に出て、そのまま一塁の守備にはいるようになったとき、新聞記者は、矢後七郎の手腕を、高く評価するようになった。「矢後をもつと使つて鍛えるべきだ」という人が多くなつた。

「矢後のような逸材を、新海のかげにくすぶらせておくのは惜しい。矢後は、よそのチーム

へ行けばそのまま一塁でやつて行ける選手だ」という声が出た。

新海清は、そういう声を、黙つてきいた。全盛期には、三割を割つたら、思いきりよくやめよう、と考えていたのだ。しかし彼が三割を割つたとき、ほかに三割打者は、一人もいなかった。新海の不調でゲームを落した、という風な観察をする人さえいたが、それは、全盛期の新海清を考えている人だ、という反論が出た。その証拠に、今年も新海清は、無条件でオールスター戦に選ばれた。新海清は、ひっこみのつかない立場に、自分が立たされてゐるのを感じはじめた。今年が最後かも知れないということ、去年のベナント・レイスの終り頃、二位が確定したときにも思ったし、今年もまた、それを感じていた。

セネタースの属するBリーグでは、上位三チームが混戦してゐて、一ゲームごとに首位が入れかわる有様であつた。勢いゲーム毎に投手の出来や、その起用法や、打点の多少が問題になつた。無数の、冷酷な眼が、新海清の遅い足にも向けられた。それはかなり辛いことであつた。しかし実際、新海清自身には、どうするとも出来なかつたのだ。

その日のダブル・ヘッダーに二勝すれば、セネタースはトップに出ることが出来、二敗すれば三位であつた、加治屋監督は、全く何の躊躇もなく、第一試合の四番に、新海清を据えた。しかし、そのゲームにも、彼は一本も打てな

かった。その上悪いことに、最終回到四球に出た新海は一死後シングルで三塁まで行き、次の打者の右飛でホームをついて刺された。かなり浅いフライではあったが、三塁走者が外野飛球で生還するということは、一塁にもう一人の走者があった点から見ても、日本のプロ野球では当り前なことであった。相手の右翼手が、新海清の足を計算してホームへ好球を送ったかどうか、知るよしもないが、彼がホームで刺されたために、そのゲームを失ったという印象が強かった。

「何で矢後をピンチ・ランナーに出さなかったのか。若い矢後の脚なら、楽にホームインした筈だ」

四万の観衆の無言の叱責が、痛いように新海清には響いた。そして当然、第二試合の一塁は、矢後七郎が守るべきであった。

だから、第二試合の先発メンバーの四番に、再び新海清の名がアナウンスされたときの観衆のどよめきは、新海清が受けるべき非難ではなくて、監督の加治屋淳一が受けるべきものであったと言うべきであった。

新海清は、今朝、阿い子から電話がかかったことを思い出した。阿い子は、スタンドの何処かにいる筈であった。矢後を最初から出してやりたい、と彼は思った。

「二、三日前から、腹の具合が少し悪いんです」と彼は加治屋に言った。

「嘘をつけ」と加治屋は笑った。

「嘘じゃない。ほんとですよ」

「俺はね」と監督は言った。「数字というものを信用している。例えば、三割打っている人間には、三度に一度か、四度に一度はヒットが出るものだ」

「僕は今日四回、昨日四回、打っていない。八回に一本も出ていないんです」

「このゲームで四回打つとするだろう。そうすると、三ゲームあわせて十二打席ということだ。三割とすると、その十二打席の中で、四本位出るわけだ」

「だから、僕は三割打てないということですよ」「いや違う。このゲームで、四打席四安打という計算が出て来るんだ。俺の計算ではね」

加治屋は、それ以上とりあわなかった。そして不思議なことに、新海清は第一打席で三遊間を抜き、第二打席で右前へ流し、第三打席で、右中間を高々と抜いた。

歓声の中を、新海清は、走っていた。二塁を廻るとき、三塁コーチに出ていた加治屋の右手が大きな円を画いて廻っているのを見た。ショート

の守備位置には誰もいない。相手の投手が、三塁のバックアップに走って行くのを見えた。それだけのものを見たとき、突然、走っているのが自分ではないような気がした。新海清は、三塁キャンパスのかなり手前で、前のめりにグラウンドの砂の中へ、顔から落ちた。彼が、単にすべって転んだのではないことは、ライ

トからショートの中継して返されたボールを、

三塁手が彼のからだにタッチした時にわかった。新海清は、全く動かない一つの物体になっていた。

担架で、球場の診療室に運び込まれたとき、新海清は既に死体であった。球場の医者は、かんとんに新海清のからだを見て

「心臓死ですね」と言った。

医者が、心臓死という言葉を使ったのは、珍らしい。死因、という意味で言ったのだ。しかしそれ以上のことは、新海清のからだをふだん見ている医者にきかなければ、はっきり言えなかった。入沢マネジャーが、菊江と主治医を迎えに飛んだのは、その直後であった。あわて、病院へつれて行け、と言ったのは、茂木オーナーであったが、死んでしまった者を、何処へ入院させればいいのか。誰も、返事をしなかった。ゲームは再開されていて、其処にいるのは、オーナーと医者と、中崎コーチの三人だけであった。新聞記者がすぐに数人飛んで来たが、整備員に追い返された。

「まだ此処にいるのか」

「病院は何処だ？」

「容態は？」と彼等は口々にきいたが、整備員には、答える資料が何もなくあった。そして再開されたゲームが終る前に、入沢マネジャーが、妻の菊江と、寺原という近所の医師を連れて戻った。寺原医師の考えも、前の医者と同じであった。

「肥大が少しあったのです。二、三日前に、腹

の具合が悪いから薬をくれ、と言って見えたとき自分でも大そう疲れ易く、走ると呼吸ぎれがする、と言っていました」

医者が二人いて、そういう意見に落着いたのは、この場合無理のないことであつた。そして寺原医師がその意見をのべ終つたとき、茂木オーナーは、次のことを心配した。病院へつれて行けと言つた埋め合わせのように、茂木は、てきばきと、入沢に次の処置を命じた。それは、ゲームが終つて人がなだれ出て来ないうちに、新海清の遺骸を運び出すことであつた。手配がついて寝台自動車と呼ばれ、どうやら人目をひかずに遺骸を移したあとで、茂木オーナーは、寺原医師にこう言つた。

「会社の幹部と相談しなければならぬことですが、どうもこれは、自宅か病院へ行つてから死亡したことにした方が、外部に対して具合がいいようですが……」

「私もそう思つていました」と寺原医師は頷いた。

誰にも、計画や、悪意があつたわけではない。それは要するに、新海清の人氣に由来する社会的影響への考慮であつた。入沢が、もう一度一緒に新海家へつて行き、茂木オーナーが残つて、ゲーム終了を待ち、加治屋監督と事後の相談をすることになった。

良人の遺骸につきそつて自動車に乗るとき、菊江が茂木に

「妹が来ませんでしたでしょうか」ときいた。

菊江は、此処へ来る時、当然、阿い子が傍にいるものと思つていた。

「来ませんでしたよ。スタンドにいたんですか？」

「今朝電話で、そう言つていたものですから……」

「何かの都合で、来られなかったんでしょう。電話をかけさせましょう」と茂木は言い、遺骸に一礼した。

走り出した寝台車の中で、菊江は、入沢と向かい合つていた。寺原医師は、助手台に乗つていた。

「その時の様子を、ごらんになりましたかしら？」

「ええ」

「どんな様子でしたの？」

「物凄く當つていましたね」と入沢は目をつぶつた。「三本目のヒットを右中間に打つて、三塁へ走り込もうとしていた時です。誰も、そんなことを予想なんかしていません。ベンチが総立ちになつて、飛び出して行きましたよ。最初は、転んだだけだと思つたし、すぐに起き上らないんで、何処かを痛めたんだと、みんなにかかえられて来たとき、まだ呼吸があつたんじゃないかな、地下道を通つてい

時、いけなくなつたんです。しかし、信じられない。最後のヒットは、目のさめるような当りだった」

「……………」

菊江は、自分が泣いていないことに気付いた。悲しみというものは、驚愕と同居し得ない性質のようであつた。今にも自分が泣き出すかと思ひ、袂の中でハンケチを握りしめていたが、何かと、重大なことを考えなければならぬような気がした。絶望のただ中へはいると、絶望は見ることが出来なかつた。

奇妙な葬列

一

月曜日の朝、東京地検の高山正士検事は、居間の八畳の隅に置かれたベッドの上で目をさますと、妻を呼んで、朝刊を全部持つて来させた。

「ベッドでごらんになるんですか」と妻は目をまろくした。かねがね検事の妻は、良人が新聞を横目で睨みながら朝食をすることを嫌つていた。しかし何度文句を言つても、高山検事の習慣はあらたまりはしなかつた。それがベッドへ新聞を持つて来いというのは、更に我慢がならないことであつた。

「起きてからごらんになったら……」

「いいから持つて来なさい」と検事は少し強く言つた。

「まあ、こわい。わたくしは犯罪者ではございませんよ」

検事の妻は、言うだけ言つと、言われた通り

にした。それから「お食事は？」ときいた。しかしその時検事は、新聞のスポーツ欄をひらいて、喰いつくような顔で読んでいた。何かの事件かと思ったが、そうではない。高山検事が読んでいるのは、確かにスポーツ欄であった。検事の妻は黙って部屋を出て行った。

新海清のことが大きく出ていた。球界はじまって以来の不慮の出来事、という見出しがついていた。高山検事は、別の新聞をひらいた。それには、新海清試合中に倒る、とあった。また別のには、不世出の大打者劇的な最後、と書いてあった。内容は大きくて違わない。昨日、高山検事自身が見た通りのものであった。しかし、新海清が、結局夜の十時頃、死亡した、ということとは確かであった。死んだ、ということとは、彼が試合中に倒れたという事件よりも、かなり後になって新聞社にはいったらしく、記事が二段に分れていた。劇的な最後という見出しをつけた新聞は、続報がはいってから組みかえたもののようであった。グラウンドに倒れている新海清の写真のせている新聞もあり、のせていない新聞もあったが、死者としての彼の写真や、自宅の写真のせた新聞はなかった。十時頃、という時間は書いてあったが、それがニュースとして新聞社にはいったのは、更にずっと遅くなってからであったようだ。死因について、心臓麻痺というのもあり、心臓衰弱というのもあり、狭心症というのもあった。しかしいずれにしても、高山検事自身が、ネット裏から見えて

たことに、その記事を、つまり、新海清が死んだ、という事実をくっつければ、それでいいわけであった。不幸な死があったのだ。日本の球界が、優秀な一人の選手を失ったことは事実であった。

オーナーの談話や、選手達の、悲しみをこめた追憶は、高山検事にとって、あまり重大ではない。セネタースが、首位争いのこの大切な終盤戦に、若い矢後七郎を一塁に起用し、新しい四番打者に、誰かをくり上げなければならぬ、ということも、大して興味をひかない。

高山検事は、かなりながいこと、それらの新聞記事を眺めていた。それから、ぶるんと頭を一つ振って起きた。

「セネタースの新海が死んだよ」と検事は妻に言った。検事が、食事の途中で妻に話しかけるのは、珍らしいことであった。彼は、スポーツ欄以外の記事はまだ見ていなかったが、どういうわけか、その日は、食事中に新聞をひろげようとしなかった。

「昨日、僕が見ている前で、だ」

「試合中に死んだんですの？」

「死んだのは夜だ。しかし、試合中に倒れたんだ。大きな三塁打を打ってね、もう少しで三塁ベースだというところで倒れた」

「珍らしい。怪我と云いますね」

「珍らしい。怪我と云うのは、よくあるがね。死んだのは、二十年も野球を見ていて、はじめでだ。いや、一度あった。久慈という名捕手が

死んだ。しかし、僕はその時見ていなかった」

「運動選手というのは、大体丈夫なものになるものでございましょう」

「そりゃあ、そうさ」

「それでも、そんなことがございますのね」

「少しは何処かが悪かったらしいね。何しろ心臓のだからね。節制もしているだろうが、夏の過労がこたえているんだ。それに、新海はもう相当な年齢だ」

食事が終わったので、検事は出勤の支度をした。月曜日だから、役所は仕事がつまっているに違いなかった。

二

その次に、新海清のことが、高山検事の頭に浮んだのは、仕事がすんで、夜遅く大森の自宅へ戻って来てからであった。

「野球葬というの、どういうことをするんでございましょうね」と検事の妻がきいた。

「別に、葬式にかわりはないさ。費用を誰が出すか、という違いだけだ」

「明日でございましてね。大そう子供に人気のあった選手だそうですね。御近所の子供さんも、明日はその人のお葬式へ行くんだと言って居りますわ」

「そうかね」と検事は頷いた。

それから一晩中と翌日の半分、検事の頭から、このことが消えたり、またあらわれたりした。それは、二十年もの間野球を見て来たフ

ンとしての高山正士が考えているようでもあり、検事としての自分が考えているようでもあった。

高山検事は、何故、新海清のことが、いつまでも頭を去らないのか、ということ考えた。何か理由がありそうでいて、なかった。商売柄、目撃した出来事の裏に、犯罪のようなものがひそんでいるのではないかと、自分が疑っているのかとも考えたが、根拠がない。その晩は、寝苦しかった。うとうとしていたうちに朝が来た。全然眠らなかったような気がしたが、眠ったことは確かであった。しかし、新海清のことは、やはり消えていなかった。それで、とうとう肚をきめて、新海清の遺族を訪ねてみることにした。余計なことかも知れないが、自分のために、納得する必要があったし、デビュイ以来の新海清の活躍を眺めて来た一ファンとして、そうぶしつけなことではないと思った。

新海清の家は、人に聞く必要がなかった。子供の歩いて行く方へ歩いて行けば、自然に彼の家の前へ行けた。学校のある時間だから小さい子供が多い。道路いっばいに群れていた。

検事は、受付へ行って名刺を出し、奥さんに会いたいと言った。しかし「ファンとして、ただのお悔みに来ただけです」とつけ加えることを忘れなかった。検事が通されたのは、北側の三畳であった。ふだんは子供部屋に使っているようであった。検事は悔みをのべたあとで「私は昔から新海さんのファンだったのです。

ちようど日曜日の試合も見て居りましてね」「はあ」と菊江は頭を下げた。喪服を着ている菊江は、凄じ程美しく見えた。

「あまり突然で、——勿論私の仕事とは何の関係もないのですが、何か、健康でも害されているのかと思いました」

「いいえ。いつものように、元氣に出かけたんでございます」

「新聞には、何か最近非常に疲れて居られたようだと書いてありましたが……」

「夏の終り頃、おなかを悪くいたしましたして、そのせいで暑さがこたえたのだと、自分では……」

「医者にかかって居られたのですか」

「はい。御近所の寺原さんという方に、ずっとみていただいて居ります」

「とに角残念なことでした。御葬儀の時間に、からだがあかないので、おとりこみのところをお邪魔しました」

「いいえ」

「何かまた将来、私でお役に立つことがありましたら、御気兼ねなくおいで下さい」

「ありがとうございます」

検事は、話をきり上げて、仏前に線香を立て、だんだん人がこみ合ってくる新海家を出た。そして道へ出てから、どうせここまで来たのだから、医者にでも会っておこう、と思った。医者の家はすぐにわかった。

「検事さんが、何でもこんなところへ来られたんですか」と寺原医師は、向い合うとすぐに聞いた。

た。
「別に深い意味はありません。焼香に来たのです」

「で、私の処へおいでになったのは？」

「二、三の質問を許していただきたいのです」

「どうぞ」と寺原は頷いた。

「死因は、心臓死だということだが……」

「狭心症の発作です」

「必然性があると思いますか、主治医として」

「あります。夏場から過労であったこと。肥大が少しあったこと……」

「私は球場にいたが、ダブルヘッダーの第一試合にも出ているし、第二試合では、三本もヒットを打って疾走している」

「そうだそうですね」

「心臓について、何か特別な治療か、薬でもやっていましたか？」

「別にありません。肥大と言っても、スポーツマンとしては、普通な程度です。もし具合が悪ければ、私に相談した筈です。ただ、疲れ易いというので、売薬のビタミンをすすめて、ずつと使っていたようです」

「何という薬ですか」

「T製薬のアプロミンです」

有名な薬であった。検事の妻も常用していた。ありがとう、お邪魔しました」と検事は立上った。

「私の判断に、誤りはなかったつもりです」と

寺原医師は、検事を送り出しながら言った。
「勿論そうでしょう。氣になさらないで下さい」

検事は歩き出した。新海家へ向って歩いて行く人が多いために、検事は何度もぶつかりそうになった。いやな職業だ、と彼は考えていた。

三

役所へ出て、書類に目を通してから、煙草に火をつけたとき、高山検事は、まだ、自分が新海清のことを忘れていないのに気付いた。他人が、もしそんな状態にあつたら、くどいよ、と叱りつけるところであつた。

理由のない疑いというものがあるだろうか。

たとえば、いつも家にいて、家の中の仕事をし、子供の世話をし、自分に忠実である妻に対して、突然、何の理由もなく、不貞を犯しているのではないか、という風な疑いを抱く。若しそういうことがあるとすれば、少なくとも何かの暗示があるか、自分の精神状態がおかしい、と考えなければならぬだろう。精神状態は正常であるとして、新海清の場合、何か不吉なヒントがあつたか。朝、元気で家を出て、殆んど二試合の間活躍した選手が、突然倒れた。病氣としか考えられない。しかし、犯罪のはいり込む隙は、確かになかっただろうか。人間に危害が加えられる場合は、そう幾通りもない。ピストル、刃物、薬、そうでなければ、殴るとか、しめるとか、或いは長い時間をかけて、精神的に

圧力を加える方法。かりにこの六つの方法があるとして、新海清の場合、撃つ、斬る、殴る、しめるという四つは起り得ない。検事自身が目撃者であつた。あとの二つのうち、精神的圧力、——例えば脅迫のようなものがあつたとしても、それは新海清の頓死という風にはあらわれないだろう。すると残るのは、薬だが、少なくとも、彼が死ぬ二十四時間前まで、注射はしてない。口から何かはいつたとしても、それは菊江という妻のつくった朝食と、アプロミンと、球場の水位しかない。どれも、ああいふ死に方をもたすわけではない。検事は、新海家に行つたとき、アプロミンの壺を調べてみなかったことを、少しばかり残念に思ったが、しかし、それが新海清の体内にはいつたのは昼前のことだ。死んだのは、午後の、——そこまで考えたとき、検事は、新海の死亡時間について、誰にも確かめなかったことを思い出した。それで、電話で、新海清の家のある世田谷署の、笹木時三郎という、古い知り合いの刑事を呼んだ。

「大したことじゃないがね」と検事は言った。

「寺原という医師に会つて、新海清が呼吸をひきとつた正確な時間をき出してほしい」

「承知しました」と笹木刑事は答えた。

笹木から返事が来たのは、二十分後であつた。

「四時二十分頃だそうですね」と刑事は言った。

「四時二十分だつて？」と検事は驚いた。「新

聞には夜の十時だと書いてあつたぜ」

「その点も確かめたのです。しかし死んだのは球場で、死亡を遅れて發表したのは、球団の幹部の意見でそうなんだそうですね」

「死亡診断書には、四時二十分の方を書いてあるのだからね」

「そうですね」

「ありがとう」と検事は言った。「ことによると、君に何か頼むようになるかも知れない」

しかし、球団が、死亡時間をずらして發表したということは、あり得ることであり、それは別に違法ではない。あくまで世間に対するものであつた。

それがはつきりしたところで、やはり死因について疑いをはさむ余地は、なさそうであつた。そして、動機というものがあるだろうか。

新海清は、幾らか神経質であるにしても、人から恨みを買うような男ではない。女の關係も、——これは調べてみなければわからないが、ありそうもない。選手として、競争者はいた。ねたむ者もあつたかも知れない。しかしそれは犯罪を起すには薄弱であつた。それだけ否定的な材料があつて、なお高山検事の心から、何か割りきれないものが消えないのは何故か。

検事は、もう一度、笹木刑事に電話をかけた。

「新海清は、何か別に商売のようなものをしていただろうか」

「調べてみます」と刑事は一度電話をきり、検

事が昼食をとっている時に、直接やって来た。
「やあ」と検事は言った。

「ずいぶん久しぶりです。質屋殺し以来です」
「そうだったかな。で、例の話は、どうだった？」

「私は、野球というものに、あまり興味を持っていないので、知りませんでした。が、新海清が、渋谷で喫茶店をやっているのは、有名ですよです」

「ほう。金を出しているのかな？」

「金も出していますが、奥さんの菊江さんという人の妹で、長岡阿い子という娘が、そこで働いています」

「経営は、うまく行っているんだろうか」

「嵐鉄平という男が、店を預っています」

「どういう男かね？」

「高山さん。これは事件なんですか？」

「いや、そうとは言えない。ただ、何だか氣にかかると」

「徹底的に洗ってみましょうか」

「ちょっと待ってください」と検事は言った。

検事にはわかった。やっぱ、何の理由もなく、突然新海清に終焉がやって来た、ということが、ひっかかったのだ。死ぬ筈のない人間が死んだ、——それは、医学以外の考え方をすれば、極めて重大なことではなかったか。

四

高山検事が、ある一つの決心をして青山葬儀

場へ行ったのは、葬儀のはじまる三十分程前であつた。当代の人気選手の葬儀だけに、広場には幾はりもの受付用の天幕が張られ、広場の外の電車通りには、街の子供達があふれていた。遺体は既に祭壇に安置されていた。

「或いは無駄骨になるかも知れないが」と検事は同行した笛木刑事に言った。「葬儀が終るまで君はこの辺にいて、故人に縁の近い者、特に、家族と、その何とかいう喫茶店の関係者の動きを見ていてくれ」

高山検事は、笛木と別れると、茂木オーナーに面会を求めた。オーナーは、その日の葬儀委員長であつた。彼は検事の名刺を手に持ち、不思議そうな顔でそれを眺めながら、検事の待っている食堂へはいって来た。この食堂で食事が出来るのだが、大いひの葬儀は、昼食用の折詰を用意して来るので、お茶をわかす位の用しかない。硝子戸をしめてしまうと、外の混雑が嘘のように静かであつた。

「いったい、どんな御用件でしょうか。時間があまりないのです」と茂木オーナーは、かなりつっけんどんに言った。葬儀の日に、葬儀委員長である自分に対して、葬儀と関係のない話を持ち込まれては迷惑だ、という顔色であつた。

実を言うと、高山検事はその時まで、自分がこれから言おうとし、しようとしていることは、かなり没常識であり、死者の一家に対して非礼であるという氣持を持てあましていたのだ。しかし、茂木オーナーのそういう態度は、そのた

めにかえって検事を氣楽にした。

「早速用件を申しましょう。元來この話は、遺族の方に直接お話しすべきことなのですが、子供さんは小さいし、奥さんは疲れておいでのように思うので、あなたにお話しするのです」

「それで？」

「もう一つ前置きをしなければならぬのは、私は今、検事としてお話ししているのではないということですよ」

「よくわかりました。用件をおっしゃっていただましよう」

「新海清君の遺体を、火葬場へ持って行く前に、解剖させていただくように、遺族の方の諒解を得ていただけませんか？」

「解剖だって！」と茂木オーナーは目をむいた。「死因に何か疑わしいことがあるんですか」

「今申し上げたように、私は検事としてお話ししているのではない。したがって、どうしても、とは言いません。私は、目撃者の一人でした。ただそれだけのことだが、ちょっと不審なことがあるのです。それに、新海君のような場合は、スポーツ選手の健康という命題で、後々の役に立つのではないのでしょうか。スポーツ医学のために、です」

「……………」

「解剖と犯罪をすぐ結びつけられては困るので。そういう意味の解剖ではありません。私が口をきくから、或いはそういう感じを持たれるかも知れないが、私が今、不審と言ったの

は、二三分前まで何の変りもなく動いていた人が、突然死んだ、ということについて、ただです」

「しかし、二人の医者がみて、心臓麻痺だと言っている」

「心臓麻痺というのは、一種の総称であって、心臓の病気でなければ、法律上の死因にもならない。死亡診断書には、狭心症の発作と書いてある筈だが、何故狭心症の発作を起したかという原因は明らかではないのです。運動選手が、こういう風に突然死ぬようなことがあったら、スポーツに対する不安が出て来やしませんか」

「……………」

高山検事の言い方は、少しばかり茂木オーナーの心を打ったようであった。検事は、つとめて職業上、新海清の死因について疑念を持っている、という印象を相手に与えないように言葉を選んだつもりであった。しかし、身分を隠さない限り、検事という職業の者と向い合った人間が、多少とも、そういう感じを受けるというのは仕方のないことであった。そのために、確かに、茂木オーナーの態度がかわった。

「わかりました。これから葬儀ですから、一時間程お待ち下さい。葬儀がすんで、三十分休憩があって告別式です。告別式には、必ずしも奥さんがずっと立会う必要はありませんから、その時私が此処へつれて来ます。直接お話しになって下さい。しかし高山さん」とそこでオーナーは検事の目を見た。「もし奥さんが、どう

してもいやだ、と言ったら、どうなるのですか？」

「私は私人としてお話しするのです。検事ではありません。このまま新海君が何事もなく葬られても、別に私の落度にはなりませんからね」

「では、ちょっと失礼」

「どうぞ」

茂木オーナーが出て行くと、遺族達が待合室を出て、ぞろぞろと式場へ行くのが見えた。食堂を出た高山検事は、一番うしろから、式場へすべり込んだ。

五

それから約一時間後にはじまった、高山検事と新海菊江の対面は、大体予想した通りになった。つまり、解剖ときいた時に、喪服の人が泣き出したのだ。最初二人きりだったが、少し遅れて、茂木オーナーがはいって来て坐った。茂木オーナーにとっても、菊江がそういう風にとり乱すであろうことは、予想されたことのものであった。

「検事さんの言う通り、犯罪という意味ではない」とオーナーは菊江に言った。「突然ということとは、つまりある意味で不可解ということですよ」

「その通りです」と検事は言った。彼は心の中で、茂木オーナーは、うまいことを言う、と感じた。

「不可解をとくためには、解剖しかない。あく

まで病気に關してでしょう、高山さん」

「そうです」

「私も最初は、この方の申し出を、けしからんと思ったが、しかし考えてみると、五十人からの選手を預っている人間として、そういう問題にもはいって行く責任があるという気がして来た。しかし、今の場合、奥さんは、いやなら、いやとおっしゃればいいんです。命令ではない。——そうでしょう、高山さん」

「その通りです」

「ちょっと、茂木オーナーの豹変ぶりは奇異であつた。これでは、男が二人で、悲しみに沈んでいる未亡人を、責めているようであつた。高山検事には、茂木オーナーの肚の中が読めなかつた。オーナーとして、ほんとうにそういう考え方になったのか。

「解剖という、残酷に聞えますが」と検事は言った。「外から見たものではわからない身体の内部を、特に部分的に、心臓を主にして、しらべるだけです。若し、それでもおいやだったら、血液だけでも採らして下さいませんか」

「時間は、どの位かかりますのしょう」とはじめて菊江がきいた。

「此処から、焼場へ行く途中に、ちょっと一時間程、寄り道をしていただければいいのです。現代の解剖学は進歩していますから、あとで見て、殆んどわかりませんよ。仏様の名譽を傷つけるようなことはしません」

菊江の心は、傾いたようであつた。そして彼

女が何か言い出そうとしたとき、突然、硝子戸があいて、黒のスーツを着た美しい女がはいって来た。それが、菊江の妹の長岡阿い子だということは、すぐにわかった。よく似ていた。しかし、性格は、菊江とまるで反対のようであった。

「ちょっと失礼」と阿い子は、高山検事の横に立ったまま菊江に言った。「解剖するんですって？ お姉様、まさか承知なさりはしないでしょうね」

「……………」

「茂木さん。兄は、あたし達だけの兄じゃございません。沢山のファンの方の兄でしたわ。その方達の見ている前で、死んだんですわ。あの時、球場には四万人の人がいました。どうして、この方だけが、兄の死に疑いをお持ちになったのでしょうか」

「阿い子ちゃん」と菊江が言った。「そういう意味ではないの。スポーツ医学の問題なのよ」

「スポーツ医学ですって？」

「医学のためになるのよ」

「人間で、死んでからも、誰かの役に立たなければなりませんの？ 生きている間中、兄は、野球のために、ファンのために、そして会社を儲けさせるために働いて来たんだわ」

「阿い子さん。それは言い過ぎだよ。プロ野球は、売春とは違う」

「同じようなものよ。せめて、死んでから位、そーっとしておいて上げたいわ」

検事は、不思議な思いにとらわれていた。次に、新しい相手が出て来て反対するのに対して一度反対した者が、逆にその反対を説き伏せようとして呉れる。それは、スポーツ医学を持ち出した自分の策が成功したためだけのように見える。理論的にはつきり言えないけれども、自分の考えていることには、やはり人を納得させるだけの何かがあるのだ、という気がした。

菊江の決心を見て、阿い子はあきらめたようであった。

「あなたのお考えはよくわかります」と検事は言った。「御心配の点もわかるのです。御承諾をいただければ、誰にもわからないように処置をします。ですから、あなたも、誰にも言わないでいただきたいのです」

「そりゃあ、言いませんけれど……」

「現在、私がお話しした内容を知っているのは、どなたとどなたですか？」

「私と」茂木オーナーが答えた。「奥さんと、監督の加治屋君と、阿い子さんと……」

「あたしは」と阿い子が言った。「茂木さんからさっき聞いて、まだ誰にも言っていないわ」

「じゃあ茂木さん。加治屋さんに口止めをして下さい。特に、新聞社には隠していただきました」

「わかりました」と茂木オーナーは答えた。

六

それから一時間後に、葬儀場を出て火葬場へ向った葬列は、奇妙な葬列であった。先頭の霊柩車に運び込まれた柩は、空であった。その葬列が出て行き、人々が散ってしまったから、いやに背の高い、窓の小さい、変な自動車が、監察医務院へ向った。その中には、新海清の遺体をおさめた本物の柩と、高山検事と、遺族の代理として長岡阿い子に乗っていた。阿い子も、最初は激しく反対したのに、途中から、一種の興味を感じはじめたようであった。笛木刑事は、火葬場へ行く葬列の、一番最後の小型バスの中に、まぎれ込んでいた。火葬場の費用時間を一時間延長することによって、帳尻を合わせることになっていた。

「解剖って、見ていなければなりませんの？」と阿い子がきいた。

「いや。そんなことはない。見られないでしよう、特に縁故者の場合はね。すぐすみすみから、別の部屋で、待っていて下さればいいのです」

「そう。安心したわ。血を見るのはいやなの。でも、死体でも血が出ます？」

「出ますよ」

「やっぱり見ないわ。見たってわからないし……」

「しかし、あとで、確認だけはしていただきますよ」